

比較思想（北川東子、2009 年度夏学期）

〈はじめに〉

比較思想……それは 15 組で選択している人は多いはずなのに、授業に出ても 15 組を殆ど見かけない素敵な科目……。当然レジュメを持っていない人もいると思うので、レジュメ+軽く説明（板書からの）って感じでシケプリを作ろうと思います。第一回はガイダンスかつ出席していないので、第二回からのものとなります。あとドイツ語の長文はどうせ分かんないから無視してます。レジュメは普通の文字、説明は斜体です。

ホントは「これさえ読めば北川東子のハイデガーは完璧！」ってものを作りたかったんですが、

- ・後期思想が妙に混ざってる orz
- ・休講多すぎて解説終わってない……
- ・経済＼(^o^)/、ドイツ語＼(^o^)/

ってことで諦めました。てか北川先生のハイデガーは授業もレジュメも板書も本も分かりにくい！

ついでにこれには間違いも混ざってるかも。てかハイデガーとか理解出来たら俺すぐにも哲学者だよ……。

最後に斜体部分、意味不明だし矢印だらけだけど、頑張って板書の再現と分かりやすさ（でも分からない）の両立を目指したんで許して下さい。

〈試験について〉

試験問題は 2 問。「ハイデガーの存在論（現存在分析）について」と『安全』or『歴史』についての論述が求められるそうです。

「ハイデガーの現存在分析について」は大きく分けて二通りのアプローチの仕方があります。一つはハイデガーの哲学について解説・説明を施すこと。もう一つはハイデガーの行った分析についての自分なりの考察・まとめを示すことです。前者は間違いを書いたら終わりだし、北川先生の主義からすると明らかに後者を求めていますので、皆さん適当に自分なりの考えを考えておいて下さい。

『安全』or『歴史』については授業で何回か書かせた質問をテストでもまたやるよってことです。結局休講ばかりで、やると言っていた「安全」に関する総括もしなかったもので、誰も北川先生が一体何を求めているのか的確に掴めてはいないと思うので、まあどうしようもないです（笑）。

第二回 ハイデガーの「存在の思考」

ハイデガーという哲学者・思索者（Denker）の凄さ：それは「問うこと」das Fragen の凄さ

1 「原理の探求」としての哲学を新しく始めたこと

* 「哲学とはなにか」

哲学では原理の解明が目指されてきた。原理とは公理を積み重ねて最終的にたどりつくような、ある何か自体が成立する基本を指す。カントの定義によると原理は「可能性の条件」で、その可能性とは対象の認識の可能性のことで、よって原理は一種の意識の認識装置である。

らしいよ

* 「私のこの存在の原理とは何か」

→ハイデガーの答え：「原理的なもの」の位置を問題とする：原理的なものは「原理機能」をもつ

→原理機能とは：「構造化」そのものを可能とするもの

「原理とは何か」という問いに対しては旧来「Aが原理である」というように答えられてきた。そこでハイデガーはその問いを問い直し、「原理的なものの位置」というように答えた。てか意味不明orz

(Wittgensteinの言語理論もまた似たような構造をしている。

「世界とは、そうであると言表されることの総体である。」

では、そのような世界の言表を可能とするのはなにか→論理形式：しかし論理形式は、正しい言表が行われたときにそこに現れているのであって、それ自体として取り出してみることはできない。)

2 私たちが「世界を理解する」仕方について厳密な考察を行ったこと

人間の意識の働き方は「私はこのものを見て、それについてこう理解する。」という表面的な構造を取るが、しかし、この表面的な構造を支えている次元がある。

* 世界理解には「世人」 das Man という次元がある

「世人の次元」：平均的で、疑問の余地がなく、うまく機能している

→「実存」（個人が孤立して個別でしかありえない次元）の欠如

いわゆる顔落して非本来性の生をいきてる状態ってやつですね

* 世界理解には「歴史主義」という次元がある

「歴史」の次元：現在によって規定された過去のイメージで過去を理解する

→「将来」（到来するものの次元）の欠如

3 「存在の思考」を始めたこと

「存在の思考」のさまざまな試行錯誤

ハイデガーの中心課題は「存在（ある）についての問い」である。ハイデガーはそれまでの哲学の「存在」の扱いは、様々な存在するもの（神、実存、原理 etc）、ハイデガーの言うところの「存在者」について考えたに過ぎず、「存在」についての問いは忘却されてしまっているとした。

1) 「事実性の解釈学」

* 「自分が今このようにある」という事態

→ 「ある」ということのなんらかの解釈に基づいている

* 存在と解釈との循環性

「こうある」から「こうあると分かる」

「こうあると分かる」から「こうある」

「現存在」の事実性とは：事実でありながら解釈することで成立するような事実

→ 私たちは、この世界の姿を捉えるためには このような事実性の概念を必要とする

事実性とは「我々」の「固有」の「現存在」の存在性格（現に今ここにいること）を表す言葉である

* 自己自身について目覚めておくこと

（レジュメにはマタイによる福音書の一節がのっててるけど、ここではスルーします）

→ 「気づき」といわれるような知のあり方

・ 時間との特殊な関係（カイロスとしての時間のありかた）

・ 生の独特な運動性（頹落）：世界とどう関わっているか（Besorgen, Sorge）苦しい、つきささる、釘止めされるなどの感覚→Meldungssinn（お告げの意味）

いわゆる「良心の呼びかけ」に応じて「死への先駆」をすることで人は「頹落」した「非本来性」から、「本来性」を生きることが可能になるってやつですね。

第三回 「ハイデガーの存在論」

ハイデガー「存在の思考」の試行錯誤

1 「事実性の解釈学」 Hermeneutik der Faktizität としての存在論

公刊されたものとしては『アリストテレスの現象学的解釈』『存在と時間』

講義集では『オントロジー 事実性の解釈学』や『形而上学の根本概念』

* 「存在」 Sein と「解釈」 Verstehen との循環性から「存在の意味への問い」 die Seinsfrage を立てるといふ試み

* この段階では「存在の思考」は人間のあり方を「現存在」 Dasein という視点から位置づけ、「現存在」分析 Daseinsanalytik とそこから構成される世界のありようを分析した

Da-Sein: Da=今、ここ→端的な事実性

2 「もうひとつの始まり」 der anderre Anfang についての哲学、つまり「存在の歴史」 Seynsgeschichte としての存在論

『哲学への寄与』や『世界像の時代』

* 「近代」の批判：とりわけ「近代の学問」 (= 「数学的学問」) と、その根底にある人間中心主義 (「主観性の形而上学」) : そこから生まれた「立て置き」 Gestell としての存在把握の批判

* この西洋的な近代を導いた歴史ではなく、別の歴史の潜在的な可能性を探る試み

人間中心主義による世界の捉え方では、世界は私の目的にとって合理的なものとして把握される。合理的なものは数学的計算に置き換えうるため誰もが同じくわかり、また装置をつくり再生産することが可能となる。このような技術的な思考で「存在把握」をおこなおうとすることは、自分の目的に適う形でしか理解しえないため、危険なことである。

3 「詩作としての思索」

『思うとはなにか』、さまざまなヘルダーリン論など

* 「ことばは存在の家である」という有名な命題のもとで、詩人のことばに依拠して、新しい「存在の思考」を紡ぎだそうとする

はいはい後期後期、スルー♪

1 「事実性の解釈学」としての「存在の思考」

1) 「存在」と「解釈」の循環性

2) 「存在の問い」ないし「存在の意味への問い」(『存在と時間』)

* 「忘却された問い」としての「存在の問い」: 新しく「存在の問い」を立てる必要がある

問題としては古代ギリシア＝西洋哲学の起源において既に提出されていた。

ハイデガーは「忘却されていた」と言い、同時に「陳腐化されていた」とも言う。

(プラトンの『ソフィステス』「というのは、明らかに君たちは、『ある』という表現を用いるときに、自分たちが何を考えているか、ことさらに考えなくても、良く知っている。私たちは『ある』ということを知っていると思い込んでいたのだが、今や、困惑してしまっているのだ。」「『存在と時間』巻頭) →では、このように忘却されて、しかし同時に陳腐化された「問題」について新たに考え直すためにはどうすればよいか: ハイデガーはその手続きを「破壊」Destruktion と名付ける。

まあ忘れられちゃったんだから、その忘れられるにいたった考え方を一回壊してその考え方から離れてみようぜ！って感じでしょか……

* 「陳腐化」とは起源の忘却である

中世におけるラテン化（＝ギリシア的世界（思考）の誤った翻訳）、近代の数学的合理主義（「技術的な存在観」という一面性）

→では、どのようにして起源へと帰ることができるのか：Urwort（Ur-wort=原・語）という考え方

言語の歴史が示す「起源」性を用いる

「存在論」→Ontologie(on=存在、logie=logic)は近代の造語→metaphysica

アリストテレスの『形而上学』metaphysica=meta（後に）、physica（自然学）

physis（自然）とはそもそもどのような意味があるのか

自然：おのずからそうなっているさま。人工、人為ではなく、おのずからなる生成・展開によって成り出た状態

（アリストテレスの場合：あらゆる存在者一般にわたる原理についての学（第一哲学）、他方で最高の原理としての神（theion）についての学（神学）：それ自体は動かないが他を動かすもの：不動の動者）

「自然」（自らなるもの）の原理→二つの流れ

①存在一般の原理

②最高の存在としての神（＝不動の動者）についての学

* 「存在の意味への問い」というハイデガーの試み『存在と時間』

sein という概念の三つの特質

- 1 「ある」はもっとも一般的な概念である（それはなんらかの領域を示す類概念ではない）
- 2 「ある」は定義できない（定義とは類とそこからの種差から成立するのであれば）
- 3 「ある」は自明な概念である。「誰もがそれを分かっている」という平均的な理解可能性は理解不可能性を意味している。→私たちはすでに「存在についてのなんらかの理解のうちで」生きている

定義は類概念と種差からなされる。Ex)人間は言葉を持つ（種差）動物（類概念）である

「ある」ということは「ない」ということの反対としてしか捉えることができず、私たちは「ある」ということを定義というよりも解釈や把握でその意味を掴むべきである

第四回「ハイデガーの存在論」

～前回から～

伝統の破壊 *Destruktion* という手続きと *Urwort* (言語) という着眼点

*どこを出発点として「存在」について考えるべきか (「事実性の解釈学」)

→二つの方向

1 「存在」テーマの特殊性から「基礎存在論」*Fundamentalontologie* へと向かう

「存在」とはどのようなテーマか: 「存在と存在者との区別」(「存在論的差異」*ontologische Differenz*)

という根本的問題

→いくつかの難点

基礎存在論 ⇔ 実質的・領域的存在論 = 学問・科学の基礎論

ex) 数学という領域 → 数の与えられ方

ex) 生命体 → 有機体・システムとしてのあり方

基礎存在論 → 「存在そのもの」についての哲学

(「どのようにあるか?」ではなく「あるとは?」について)

→ 言語・概念性

ex) 「歴史」 → 学問・人類の過去 (記憶) にとっての基礎存在論

→ 歴史概念 (「歴史とは何か」) についての理論ではない

歴史認識の理論でもない

歴史学のメタ理論でもない

「本来的に歴史的に存在するものを、その歴史性へ向けて解釈すること」

「存在そのもの」を問う: 基礎存在論

→ 存在論的差異 = 「存在そのもの」と「存在するもの」との区別

Es gibt … 「ある」 = 与えられているということ

「贈与」*Geben* としての存在

「前言語的な (言語化以前の) 開示性」

→ この区別の難点

→ 私とともに起こる「出来事」

ex) 「この黒板は置き場所が悪い」という事態

↑ 黒板の「質」ではない

↑ 黒板と書き手の関係だけでもない → 「教室」全体

状況把握 → 具体的な対象の物理的・空間的關係ではない

→ある漢とした「全体」の把握

反認知主義

「存在そのもの」→行動によって現れる何か

ex)「日本人の赤ん坊」と「アメリカ人の赤ん坊」

本質≠現象

意味不明ですがこれは板書そのままです。まあ大事なのは多分現存在分析の方なんで諦めてスルーしちゃいましょう。

2 「現存在」 das Dasein (「存在的優越性」という人間の独特のあり方を出発点として「現存在分析」 Daseinsanalytik へと向かう

「現存在」は、他の存在者とならんで現れるような存在者ではない。むしろそれは、この存在者にとって、そのあることにおいてこの存在自体が問題となるのであり、そのことにおいて「現存在」は特別な存在なのだ。」(『存在と時間』16 ページ)

* 「現存在」はたしかに存在的には最も近い存在者であるが、存在論的には最も遠い存在者である」

→「自分の存在」をむしろ「世界」の方から理解する傾向がある

* 世界内存在 das in-der-Welt-Sein という「現存在」の基本的なあり方

「世界内存在」のふたつの次元→「内存在」(うちにいること)

→「世界」(世界をもつということ)

1) 「内存在」 das In-Sein:空間的な関係ではない

この In-Sein は「住まう」「とどまる」という意味がある

ここらは後の授業でしっかりと (けど意味不明ww) 説明してますから後回しで

第五回「ハイデガーの存在論」

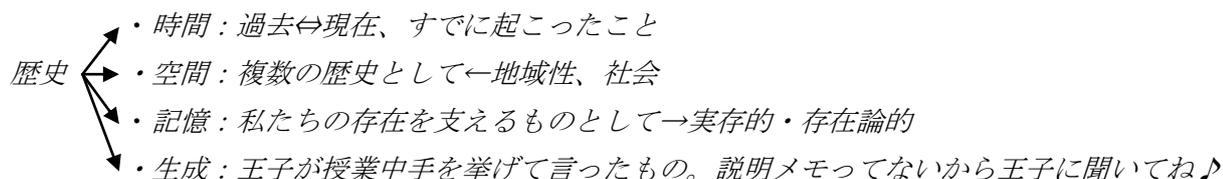
ハイデガーの哲学「私が……を理解する」←抽象性の受容体として

1 ハイデガーの「現象学的解釈学」の立場

* 「遂行的意味」 der Vorllzugssinn としての「意味」

「私たちは歴史をもつ」という命題について

「歴史」 Geschichte のさまざまな意味



歴史的事実→瞬間を示す

「もつ」ということの意味

- 1) 対象との関係として←物を所有する
- 2) 「使える」という意味で←権利を所有する
- 3) 「自分との深いかかわり」という意味で←ex)家族

まあこういう例を示すことで遂行的意味ってものについての理解を促そうとしてるんじゃないですか？

遂行的意味→行為としての理解

- ・ 意味：×記号の指示対象
：△記号体系内での位置価
- 「存在」の意味：「存在」の価値、仕方
：×情報、説明

まあ「持つ」の例を考えると何となく理解できますね

ただこれって存在についての説明なんてしないよ～って言うてる感じがしてなんか気に食わないところですね

まあそう捉えることが肝要なんでしょうけど……

* 「歴史」についての哲学的問題とはなにか

der Interpretation des eigentlich geschichtlich Seienden auf seine Geschichtlichkeit

「本来的に歴史的に存在するものをその歴史性に向けて解釈すること」

歴史については他と比べてもさらによく分かりません orz

2 「存在論的差異」（「存在そのもの」と「存在するもの」との区別）

存在そのもの（=das Sein）についての思考は忘却されてしまっているが、それは最も普遍的概念かつ最も自明な概念であるとともに、最も不明な概念である

存在そのものについての思考は超越性 (⇔事実性) をもつ

存在者が「ある」ってことの意味は誰もが漠然とは理解して生活しているんだけど、それがゆえに (?) 本質的な理解を妨げているって感じでしょうか？

* 「存在論的差異」に備わる難点

「謎としての性格」をもつ「存在論的差異」(『形而上学の根本概念』517 ページ以下)

→同じ次元でのふたつのものの区別ではない

→「区別の仕方」が問題なのではない。むしろ「区別」ということで両者は関わっている

→この「区別」の難点

「先取りしつつすでにそこにある」→「存在理解の先構造」die Vorstruktur des Seinsverständnisses

- ・この区別の自明性
- ・「出来事」としての区別
- ・この「区別」は人間の「存在とはなにか」と問うことのできる力(「問いの奇跡」das Wunder des Fragens)と関わっている

区別という手続き

- 区別
- 主体 (意識) と 客体 (対象) との区別 = 主客の差異
 - 「差異」と「同一性」という二つのカテゴリーを用いた手続き

区別する「私」の存在

区別において、「反省の力」をもつ存在者 = 現存在によって区別されるもの同士に関わりが生じている

→「私たちとともにこの区別はもう起きている」

この区別の出来事

→前提

→現れ→時間性

→この私 = 現存在

誰か僕にこの意味不明なフローチャートの意味を教えてください orz

3 「現存在」というハイデガー存在論の出発点

* 「現存在」 das Dasein ということばからなにが連想されるか

ふたつの次元

1) das Da (今、ここに) という「存在様態」→「世界性」(空間性、ただし単なる空間性ではなく、私がそこにいる世界として、しかも意味ある世界として) と「時間性」において現に今ここに現れている

ex) 石: 「世界がない」

動物：「世界が乏しい」

人間：「世界をつくりつつある」・「ことは『語り』をもつ」

2) 「その都度であること」 *Jeweiligkeit* において存在しているもの→その都度「私が現に今ここにいる」という存在様態である→「存在しているという点ではもっとも身近であるが、存在論的にはもっとも遠い」

ここでは現存在は、その都度、気遣いによって存在者を理解しそれを利用し存在するということが言われているのではないのでしょうか？

「空間性でなく意味ある世界として」ってのは、世界とは現存在の気遣いによる意味連関の総体で、まさにそれが出会う場所って感じのことを指しているのでは……

「…もっとも身近…もっとも遠い」ってのは、現存在の日常性のように、現実で存在的に身近なものは、存在論的には最も遠いってことでしょうか…存在の意味は現存在が死への先駆を通し生の本来性を生きることによって理解されるってことでしたし……

*ハイデガーは「現存在」 *das Dasein* をどう描きだしているか

「基礎存在論」の出発点としての「現存在」：「存在論的優位」をもつ存在者

「現存在」は、他の存在者とならんで現れるような存在者ではない。むしろそれは、この存在者にとって、そのあることにおいてこの存在自体が問題となるのであり、そのことにおいて「現存在」は特別な存在なのだ。」(『存在と時間』16 ページ)

「現存在」はつねにみずからを実存からして、つまり自分自身であること、あるいは自分自身でないことの可能性から理解している。」(『存在と時間』17 ページ)

現存在：*das Dasein* を出発点

↑現存在の「反省の力」

Da=今、ここに

→時間性と世界性

→その都度性

*「問いの構造」 *die Fragestruktur* という最初のアプローチ：「現存在」は「問う」というかたちです
で「存在」に関わっている

「存在とはなにか」“*Was besagt Sein?*”という問いを立てる「問う力」

*「問い」を構成する三つの要素

das Erfragte：存在の意味

das Gefragte：存在者の存在

das Befragte：存在者そのもの

→ここからハイデガーは、「現存在」がどのような存在様態をもっているかを分析することで、そこにどのようなかたちで、「存在の意味」が遂行されているかを見ようとする

1) 「内存在」 *das In-Sein* の分析：空間的な関係ではない

またもレジュメは内存在に入りかけるところでストップwww
内存在は次こそちゃんと扱われるよwww

第六回 ハイデガーの存在論

私たちは「世界」をどう捉えるか

ここで「私たち」と言われる立場とは→「主観」⇔「客観」
→「知覚のゼロ点」
→「現存在」Daseinの「現」Da

近代以前：世界＝自然：「神が書かれた書物（＝聖書）」としての自然観
「神の書物」としての自然を読む存在としての「人間」

主客の二元論（分離）

近代哲学＝近代科学→「数学」的な世界観

→反省・批判

→「現象学」的立場

→「記述」の方法 *Deskription* (What?→How?) ←「私」＝知覚のゼロ点

「現存在」分析→解釈学的「現象学」の方法

→「世界」へ向かう

→「世界内存在」*das-in-der-Welt-Sein* という存在様態（どう存在しているか？）

→「内存在」*das In-Sein*

→*die-Welt* (= *Weltlichkeit* 「世界性」)

* 「「現存在」はたしかに存在的には最も近い存在者であるが、存在論的には最も遠い存在者である。」

→「自分の存在」をむしろ「世界」の方から理解する傾向がある

* 「世界内存在」という「現存在」の基本的なありかた

「世界内存在」のふたつの次元→「内存在」（うちにいること）

→「世界」（世界をもつということ）

1) 「内存在」 *das In-Sein* : 空間的な関係ではない

≠コップの中に水がある：空間性

語源：in=innan→wohnen：住む、住み込み

→sich auf haben：滞在する

das Wohnen：住むこと

“Bauen（建てること）Wohnen（住むこと）Denken（考えること）”

2) 「世界のうちにいる」das-in-der-Welt-Sein とはどのようなこと

「世界との出会い」の様態

「世界内存在」→「内存在」からみた「世界」の存在様態

「無関心にそれを見ている関係ではない」⇔客観的・科学的

見ている：視覚的

関係：出会い

→das Zu-Sein：そこへ向かうこと（一義的）→Besorgen/Sorge：気遣い→「～として（～として構造）」

zu→手元で



単にある（副次的）＝客観的

→「世界は発見され、開示される」（解釈された意味をもったものとして）

⇔世界のリアリティ：客観的につねにある

つまり「現象学」という近代までの哲学の考え方と異なる手法を用いて「現存在分析」を行い、「現存在」の存在様態は「世界内存在」だとハイデガーは導いたわけです。

それは「現存在」の、「存在者」のその可能性に向けての「気遣い」から「存在者」の意味を把握し、その意味連関として世界を獲得するという特性に起因していて、その意味から、世界とは一般的に考えられる客観的な空間として常に存在するものとは違うんだよって感じの意味なんじゃあないかと思うんですけど……

第七回 ハイデガーの存在論

1) 世界をどう捉えるか→世界は私が捉えるものではなく、私が出会うものである

Die Welt ist das Worin des Seins des Daseins

「世界とは現存在があることのそのうちでのことである。」

世界との関わり（＝現象として）⇔知覚の構造（「私」を知覚のゼロ点として）→存在論的に

なんのこっちゃ

2) 「現存在の基本的あり方としての気遣いは世界を発見する」

「気遣う」とは世界との関わり方→世界と出会う→現存在は「世界を発見する」(世界はリアリティとして常に同じようにあるのではない)

世界とは……

- ・同一のクオリティではない
- ・世界とは出会うものだ
- ・「現存在」は世界を発見する

→世界との出会いのあり方=「現存在」の持つ気遣い→「…のために」「……として」の世界
≠机を机として科学的、理論的に捉える

→指示連関(それぞれの物は他の物を指し示す、全体を想定する)=世界

→「日常性」=馴染み深さ⇔不気味さ←知覚と意味のアンバランス

不気味さってのは例えば夜の教室とか考えてみてください

3) 世界とはどのように出会うのか：この出会いのいくつかの特徴

* 「指示連関」 Verweisungszusammenhang として

* 環境世界の「馴染み深さ」 Vertrautheit

世界とは **das immer-schon-da eines vertrauten Verweisungszusammenhangs**

* 「記号」という現象

記号→指示の機能

記号という現象→世界の「指し示す」という基本的なあり方

* 「意義を理解すること」を通しての世界との関わり

「世界」と「現存在」との関わり：「意味がわかる」という関わり方
：「理解」←「言語性」

4) 「世界性」から空間性を考える

「環境世界」 Umwelt の **das Umhafte** として捉えられた空間

das Umhafte というアプローチの仕方：「幾何学的空間」を出発点としてはならない

空間性(均質的な空間ではない)：近さ Nähe、あたり Gegend、方向付け Orientiertsein として
「遠隔」 Entfernung としての「近さ」

「世界性」から「空間」を捉えると、それはデカルトの延長物といったものでなく、またキリスト教的人間観にもとづいた神的なものとの結び付きも否定され、「ぐるり取り囲むもの」*das Umhafte*としてそれを理解することが出来るようになる。

ちなみに「取り囲む」ってのは現存在の空間的關係を「(それを)ぐるり取り囲む(めぐって)」ってのはその気遣いを表してるとか……

でそんな風に捉えられた世界ってのは計量不可能なもので、そんなわけで距離という概念に代わって「近さ」(遠隔)「あたり」「方向づけ」って3つの仕方では把握されるようになるらしい。

第八回 ハイデガーの存在論

1 「世界性」*Weltlichkeit* から「空間」を考える

* 哲学的問題としての「空間」

デカルトの「延長物」*res extensa* と「思惟」*res cogitans* との区別
(物体の世界と精神の世界を峻別するための枠組みとしての空間)

* カントの「空間」の問題：認識論的な視点

「ある困難な問題」としての「空間」

空間は「経験的な観念」ではない→むしろ直観の「アプリアリで形式的な条件」ないし「純粹な直観」

もうめんどいのでデカルト、カントはスルーします
どうせ俺わかんねえし……

* ハイデガーの「空間」についての考察：存在論的視点

das Umhafte としての捉え方

「現存在」の「空間性」を構成する三つの存在論的なカテゴリー：「近さ(遠さ)」*Entfernung* 「あたり」*Gegegnung* 「方向づけ」*Orientiertsein* → 「場」*Platz* という考え方 ⇔ 距離や位置ではない

2 「世界性」から捉えられたときの「空間性」と「時間性」との関わり：「時空間」*Zeitraum*

* 世界のなかにいる存在者・存在物

→ 「現存在」「手元存在」「手前存在」

空間的次元「現・ここ」「手元に」「目の前に」

時間的次元「そのつどの間で」(滞在・間 *Weile*) 「すぐに」(現在) 「すでにいつも」(既存性・過去)

* 「空間性」から「時間性」へ

物理的時間から「世界時間」Weltzeit（意味をもった時間）へ

* 「他者」の存在：時空間の共有：等根源性

世界における事物（存在者）への気遣い

→ 「として構造」

→ 意味あるものとして世界と出会う出来事

→ 記号

また記号の指し示すという機能には他の側面の消失という現象を伴う（「世界のなかで消え去る」）

これらを言語性のもとに捉える

→ 「存在の合図」「存在の語りかけ、要請」「お告げ」

なんで言語性のもとで捉えたらこうなるんでしょうね？

てかことばの意味も分からない。

もっとしっかり説明してよ北川先生、そしてハイデガー。

ハイデガーの空間性→世界性からみた *das Umhafte*

存在論的カテゴリーにおける「現存在」の条件

→ 「～へと向かう」*Zu-Sein*（志向性→「現存在」←「気遣い」）

→ 「近さ」「あたり」「方向付け」

→ 「あたり」≠地理の概念

= 生きることや死ぬことに関わる概念

世界の全ての存在者・物は「場所をもつ」
┌・自然界での場所
└・気遣いを与える場所

空間性のなかにひそむ時間性→「空間」（=外部・外的な現象）と「時間」（内部・全ての現象）

「時空間」*Zeitraum*

→ 時間的存在としての「現存在」、「手元存在」（=すぐに現在）、「手前存在」（=既存性過去）

手元存在=道具存在=気遣いによって存在者が取る存在様態じゃなかったのかな……

第一すぐに現在って言ったらまさに現存在って「今・ここ」的な意味だったじゃん……

ホントもうお手上げです北川先生。

そして皆さんご存じのように、ハイデガーによると存在の意味とは時間性なんですけど、もちろんその部分は当のハイデガーすらブッチしてますから、この講義でその説明がなされたなんてよもや考えちゃいけませんよ！

とにかく時間性へのロジックは俺にはつかめない。

第九回 ハイデガーの存在論

ハイデガーの「時間性」Zeitlichkeit

*『存在と時間』の冒頭：「時間をあらゆる存在了解の可能な地平として解釈すること」が「さしあたりの目標」である、と説明されている

*ハイデガーが立てたのは「時間とはなにか」という問題ではない
→「時間のなかで存在するとはどのようなことか」という問題である

*ここからハイデガー存在論の中心的な命題である「存在の意味とは時間性のことである」が語られるようにある

まず意味ってのは普通に考えるような意味じゃありません。
ハイデガーによるとそれは「問いの構造化を可能にするもの」
つまり存在についての問いを可能にするのが時間性ってわけです。

うがった考えをすると、ここからもハイデガーは逃げにきてるのがわかりますね

*この命題を理解するための前提事項

1) 古代ギリシア以来、「実体」（真に存在するもの）は「常に現としてあるもの」という理解をされてきた

→「存在」と「時間」との密接な関係、西洋哲学における「現在」の優位

→ハイデガーはしたがってアリストテレスの時間論を分析する

アリストテレスの時間論

→現在の優位←過去と未来の圧縮

→今の時間論：「もうない今」と「今」と「まだない今」

時間の流れ=移動=「あそこの今」から「ここの今」へ

→物体に付帯するものではなく「時間のうちにある」もの

→「今」は区切りでなく、まさに「時」を構成している
……よく分かりません orz

2)「時間」はさまざまな存在者を規定可能にする

3)「現存在」の「時間性」は「存在了解」は可能とする。しかもそのような「時間性」は脱自的構造をしている

- ・「死」という終局の問題：Ausstand：欠損
- ・Ich bin gewesen.「私がいる」→「私がいた」という意識：過去の優位

4)「現存在」の「時間性」こそは「時間」を可能とする

「物理的時間」や「時計の時間」ではなく、存在論的な時間→「根源的時間」

*ハイデガーの存在論における「時間性」

1)「脱自的自己」

2)「世界内存在」を時間の軸で分析すると、三つの時間が見えてくる

Sich vorweg schon sein in der Welt als Sein bei「そのもとにいることとして、自分には先取りのすでに世界のなかにいること」

「存在了解」の未来、「頽落」の現在、「情動性」の過去

「存在」から「時間」としがちだが「時間」から「存在」を考えるべきである（でもこのケーレの説明をしなくて（出来なくて、もしくは著述中に思想そのもののケーレが起こって）、その結果『存在と時間』は未完結なんだけどね。）

→「時間」の「脱自態」としてのありかた（過去、現在、未来がお互いに規定）

→「現存在」の「構造」と「時間性」との相即

「理解」は「先構造」をもつ。つまり、「現存在」が対象理解にあたってまず何らかの可能性を予測し「企投」すること（投げかけること）は、その未来性を表している。

→「現存在」の「存在了解」において「未来」が優位性をもっている。

「現存在」の究極の可能性、「存在了解」=死

→「現存在」=「死へ向かう存在」→未来性

→つまり自分の存在の完全な規定を目指すならば、それは「死ぬ存在」や「死んだ存在」といったものではなく、「死へ向かう存在」として、「欠損」を含む自己を把握することとなる

→「脱自態」

「死」とは「生の終わり」ではなく「死の事実」である
→「私がいる」とは「私がいた」という意識が背後にあり、そして現にありつつの到来でもある

そんなことで「現存在」の「時間性」(＝根源的な時間)は「時熟の概念」である。

—— というのは思念する神は時を得ない成長を憎むものだから by ヘルダーリン
(丁)

……なんなんだこの授業は？これで終わりとかw w w w w

ってことで軽く補足的まとめを。

ハイデガーは「存在」一般の意味を解明する(＝基礎存在論)ため、曖昧ながらも「存在」というものがなんであるか把握している「現存在」を対象に現象学的分析を行います。

「現存在」は一般的に「世人」として「頹落」し「非本来性」を生きているが、「良心の呼びかけ」にうながされ「死への先駆」をすることで「本来性」を生きることが可能になる。

その「先駆」を可能にし「現存在」の根源的な存在せしめるのは、他ならぬ時間性(死は将来到来するものなんだから、当然時間についての考えがそこにはありますよね)であることから、ハイデガーは「現存在」の「存在」の意味とは「時間性」と結論付ける。

しかしハイデガーがしたかったのは前述したように「存在」一般の意味を解明すること。

そこで彼は続いて今度は逆に「時間性」から「存在」一般の意味を解明しようとしたんだが、ところがどっこい挫折してしまった\(^o^)/

そんなわけで『存在と時間』は未完の大作に、ハイデガーは実存哲学者として受け止められるようになっちゃったってわけです。

そりゃ現存在分析しかしてないんだから仕方ないよなw w w

ちなみに時間性の脱自態ってのは時間のそれぞれがおのれから抜け出してどこかへ向かうという性格のことをいうらしい¹。

¹ 木田元『ハイデガー』岩波現代文庫